

前橋文学館報

萩原朔太郎記念 水と緑と詩のまち



No.7 1997.6



個展開催とダンス

前橋文学館で、個展を開催してくれることになった。これまでにも東京で三度個展を開いたが、一週間という短い期間で、前後の準備の方が本番より長く、あわただしく終わった。それが二カ月という長期の個展で、うれしい。

館長の加藤鶴男氏が、いつか別の用事で私の家に来られた時のことであった。ダンス・スタジオに飾ってある人形や、オブジェに眼を止め「面白い」と、感心してくれたのが縁である。

館長さんはお役人にありがちな「前例がない」「館の主旨に合わない」等の堅いことは一切ぬきで、「面白い」と思う自分の感性を貫く人である。話が、たちまち合ってしまい、百年の知己のように私も言いたいことを遠慮なく、言うようになった。昨年末ごろ、正式に決まり四月二十六日から、六月二十二日までと、なった。そして度々、打ち合わせに職員と一緒に家まで来てくれることになった。

文学館の職員の人たちは、館長さんの影響で楽しんで仕事をしているのが良く分かるのである。看板からチラシ、作品目録、その他を一つ一つ作ってくれ、かつてない大がかりな個展となった。セミヌードでマネキンと足を比べるという、一風変わったチラシから入り、オープンニングは「朔太郎」橋の上で、アクロバット入り、デュエットダンスを踊ることを考えたのも、館長さんと私の息が合つたこと



だった。どちらからともなく自然に出た案だった。初日の数日前の夕方、文学館へ行くともう八割以上の飾り付けが出来ていて、そのセンスの良さと感性の良さに、うれしくて言葉も出なかった。

同じオブジェでも、家のスタジオにある時と、同一作品とは思えないほど、飾り付けが立体的で迫力があるのだった。プロの人が三人と職員の人たちが一体となって、午前中から仕事に入つていたとのことである。

私は、一月末「幕麻の家」の完結編にあたる「輪廻の暦」が出版され、取材等にもつわる仕事が殺到し、多忙を極めていたので、まめに来橋したい気持ちはあっても、実現がむずかしく、気ばかりあせていた。ようやく、飾り付けの日に新幹線に乗れても、夕方着いたのが精一杯の時間のやりくりだった。

どんな飾り付けになるのか、電車の中でいろいろ想像していたが、入館してすぐ右側の会場を見た瞬間、私は息を呑んだ。

四方ガラスのきつちりしたケースや棚に入ったオブジェ

萩原 葉子



●はぎわら ようこ

小説家・エッセイスト。萩原朔太郎の長女として1920年、東京に生まれる。「父・萩原朔太郎」(1959年)で日本エッセイスト・クラブ賞を受賞して文壇に登場。以後プロの文筆活動に入り「天上の花—三好達治抄」で第6回田村俊子賞、第13回新潮社文学賞、「尊麻の家」(1976年)で女流文学賞等を受賞。ほか長編小説「木馬館」(1991年)では円卓賞を受賞するなど精力的に活動。「置き去りにされたマリア」は、ペンシルバニア大学教授の手で英訳され、昨年CD-ROMに入る。近著に「出発に年齢はない」「舞台」「美少年虫」「或る酒場」など。今年「尊麻の家」の第3部作「輪廻の暦」を新潮社から出版して話題になっている。一方、執筆活動のほか、アダージョ・ダンスや猫や虫のオブジェ制作でも創造的多才ぶりを発揮している。

「早く見てよ」「美しいでしょ」と、言っているし、立ったり座ったりの人形たちも「ここに来て、うれしい」と、歓んでいる声が聞こえている。

「萩原葉子 オブジェに遊ぶ」の題にふさわしく、作品一つ一つが、楽しく遊んでいるのだった。

もともと、私のオブジェ作りは、趣味であり、遊び心から入ったので、仕事のように苦しんだり悩んだりすることとは縁が遠く、またアクロバット入りダンスのように、自分に鞭打ち責めながら作るものでもない。私の「書いて、創って、踊る」三つの中の一歩、気楽に気分転換で作っているものなのである。

その遊び心がいまようやく発揮出来たのであった。最初、ポシェットにつけた黒猫から、たちまち百匹余りの猫のワッペン、ネンドで立体の猫、流木の虫、魚網の髪の毛の人形、手作りの衣装、ハンドバッグ、おわんの猫、揺れるオブジェ、荒布の虫、「浮世は楽しく」のウキ、そしてウキの猫等に、十二年がかりで作った作品や新作が、納まり良く展示されていた。

館長さんも満足したように「館始まって以来の楽しさ」と、喜んでくれた。むろん、本業の代表作の小説もガラスケースに並べてあり、略歴や著作一覧表、「輪廻の暦」の書評一覧も、ワープロに打ち、見やすいように展示してある。

館の係の人から、何度も細かい打ち合わせや、問い合わせが来てのことだった。感激と感謝の余り私は胸一杯で、立ち通していた。

初日か、五月上旬にオープニングのパフォーマンスを考えたが、丁度五月十一日が毎年開催の「朔太郎忌」に当たるので、その折に父の好きだった「影を慕いて」と、自作小説のダンス化「星の流れに」の二曲を踊ることにした。私の得意とするアクロバット入りのデュエットは、石の橋で足場が良くないので控えた。橋の上や川の辺は、時ならぬ人出で大賑わいだった。館長さんとのトークで親近感を持ってくれたらしく、本も売れた。サインをする時「勇氣づけられました」と、握手を求められたが、熱烈なファンと言う人がいたのもうれしかった。

リハーサルの時「下手に踊ったら川へ投げ捨てる」と、先生に言われ「河童になつて化けて出る」と、返したが、広瀬川は水量が多く、しだれ柳の緑が舞台効果を挙げてくれたのも、印象的であった。